



前回、予てより好意を寄せていた叶さんと結ばれた俺だったが、さっそくもクソも、その翌日にはもう浮気をしていた。相手は昨日、最後までヤリそびれた日暮 燈子。俺の職場の先輩に当たる人物だ。どうやら俺は、釣った魚に餌をやらないタイプだったらしい。別に叶さんを想う気持ちが無くなっているわけではない。叶さんは本当にカワイイ。

しかしなんと、俺の様な村外の(元)ノンケはかなり人気があるらしく、燈子さん以外にも、会う人会う人の視線が俺に語りかけてくる。『抱いて♥』と…。

「あ、ううっ…、おっきい♡全部、入るかな…」
「燈子さん…っ！」

燈子さんのナカは、叶さんのはまた違った感触がした。
叶さんよりもゴリゴリした感じがする。
体制の所為もあるのか、叶さんとの時には難儀した挿入も、
かなりスムーズにいった。

俺は、ずぶずぶ飲み込まれていく自分のイチモツから、
目が離せなかった。



「はあ、はあ、やだ…♡思ったよりいっぱい出ちゃった…♡」
「…お、俺もです…」

俺はまためちやくちやに射精した。

はあっ

はあっ

ズルッ



終業後、二人の生徒に声をかけられた。

「あつ、新しい用務員さんだー!」
「?」

「ねえ、用務員さんてノンケって本当ですか?」

「…え、まあ…(一昨日までは)」

「ええ〜!本当なんだ!」

「だ、だったらなに?」

きゃっ ♀

「あのね、僕たちノンケの人大好きなんですよ。」

「は…?」

「だからあ、僕たちと、ちよっと遊びませんか…?」

きゃっ ♀



俺は、この二人と『ちよっと遊ぶ』事にした…。

「さくら…用務員さんのおちんちん…、すごいおっきい…」
「ほんとだね、いっぱい遊んでもらおう？カエデ♡」
二人の家に招かれたのだが、丸でラブホ(行った事ないが)ようだった。

「用務員さん、もう村の誰かとエッチしました？」
「え…、あ、まあ…」
「じゃあもう、おちんちん見ても平気だね。」

というか、金髪の子の方、タイツに穴が空いている…それ以前に、
とてんでもないハレンチな下着…なのか？あれは？紐…に見えるのだが…。
とりあえず、制服の下が気になって仕方がなかった。



「ふふ♡もうガチガチですわね♡シヨシヨしてあげる♡」
「ううっ！き、きみだって、我慢汁が垂れてるぞ！」
「あ、用務員さんは僕達が『いいよ♡』って言うまで、
動かないで下さいね♡」
「えっ、ええ？！」

はあ

はあ

はあ

はあ

シヨ
シヨ
シヨ

シヨ
シヨ
シヨ

「さくら…♡僕早く入れたい…」

「えー待って、僕一回、このおちんちんイクところ見たい。」

「…うう…」

「お、お前ら！俺を玩具にする気か?！」

「ね、おちんちんよく見たいから、スカート脱ごうか。」

「うん…」

スカートを脱ぐと、一気に変態じみてきて、たまらなかつた。
「な、なんていう下着つけてんだお前ら…!」

はぁっ

はぁっ

い
い
い
い

ピッ
ピッ

はぁっ

はぁっ

「ふふ♡気になります?見たいですか?」

「用務員さん早く一回射精しちやっってくださいよ…!」

目の前に突き出されたさくらの股間から、なんとも言えない臭いがした。
汗と、性器特融の臭いだ。

興奮した。

「ほらどう？気になってた制服のシタ♡」
「ぐ…っ、それ全然どこも隠せてな…あっ♡」
「あはは♡僕達のエッチな下着姿をおかずに射精しちゃいました？」

はっ♡

はあっ♡

はあっ♡

はあっ♡

はっ♡

その通りだった。

「すごい…おっきいし量も…こんなに…♡」



「うわ…す…」
「(…)」

は♡

は♡
は♡

は♡

は♡
は♡

カエデのナカは、叶さんや燈子さんよりもだいがキツかった。
硬い肉壁でぎゅうぎゅう締め付けられた。

「いいなあ、僕もカエデに入りたい…♡
あ、因みに、僕は完璧タチだから、おちんちん入れようとしないでね♡」

ぎゅんっ きゅんっ
ズキズキ…
♡♡♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡

きゅんっ

きゅんっ



「あつ、ああつ、イクっ♡」
「用務員さん僕もイク♡見てて♡」
「ううっ、俺も…!」

はあっ

はあっ

きゅん

あつあつ♡
あつあつ♡
あつあつ♡

ドクッ
ドクッ

きゅん

あつ

あつ

きゅん

きゅん

「うわ、用務員さん、まだギンギンだね…」
「まだ遊んでくれるよね…?」

はーっ

はーっ

今日の夜も叶さんと会う約束があるので、正直もう帰りたいが、
こんなにギンギンにされてしまって仕方がないので、
もう少し遊んでから帰る事にした…。
叶さん…ごめん。

アロ…

せむ…

ヒッヒッ

ムズ

ムズ

きゃん

きゃん

—

「用務員さん、今度は僕の舐めて？」

俺はもう、チンポを舐める事に抵抗は一切なかった。
というか最早、かなり興奮する。
さつきたちだから入れるなどか言われたが、
しつかりさくくもアナルを指で刺激している…。

そしてこの状況、ワガママだけど可愛い子二人に、
完全に棒扱いされてるのも、
なにか新しい性癖が開花しそうだ…。



「用務員さん…、ちよつとは動いて…
僕さくらちゃんとかちゅーしたいから…」
「は…はひ…」

俺は下から上に向かって腰を動かし続けた。
自分の快楽とは関係なく、
ただ二人を気持ちよくする為の機械になったみたいだ…。



「ふふ♥さすがにおちんちんしぼんじやってますね♥
用務員さん♥」
「また…遊んでくれますよね…?」
「う…、うん…」

俺、こんなんでいいののか？
叶さんという可愛い彼女が居ながら…、
他の男の娘たちとセックスしまくって…。
どうかこれ、バレたらコトだぞ、今度こんな事があったら、
ちゃんと断ろう…。

スーパー賢者モードの俺は、全裸で猛省した。





しかし、その後何度も二人からのお誘いに応えて、
3Pをしまくった話は…また今度…。

「…多田くん…？…どうしたの…？…今日、ちよつと疲れてる？」

その夜、もちろん叶さんともシた。そりゃそうだ、付き合って二日目だ。するだろう…。

今日も可愛い下着をつけている…カワイイな叶さん…、でも…。

ゆす、ゆす、

ゆす、ゆす、

「多田くん、無理しなくてもいいよ…？…新しい環境で疲れてるんだよ…、今日はもう大丈夫だよ…？…」

中タイけない俺を気遣ってくれる叶さん…、俺は、最低だ…。嫌だ、絶対中出しする…！…叶さんのナカに、俺の精液…！！

ヒワ
ヒワ
} }
{ {
}

フワッ
フワッ
フワッ
フワッ

「はあ、はあ、叶さん…き、気持ち良かったです…、
ありがとうございました!」
「う、うん…僕も…良かったよ…」
(あ、あれ…昨日はあんなにすごい量だったのに…!)

無理矢理イった感が強かった…俺も、叶さんも…
俺、ちゃんと叶さんを大事にしていけるのかな…、
すごく不安を感じたのだが、



さっきまで俺のモノが入っていた、
叶さんのぽっかり空いたアナルを見ていたら、
なんだかとてもない罪悪感に苛まれた。

俺なんかの為に、こんなにアナルぽっかりさせて…。
絶対幸せにしなきゃ…。

ヒン
ヒン
〜
〜

ほわ
ほわ

ポツ　カリ…♡





























































































































































































































































































